



39

世界文学全集

裸者と死者〈2〉

メイラー／山西英一訳

新潮社

世界文学全集 39

裸者と死者 II

ノーマン・メイラー

訳者 山西英一

*Copyright in U. S. A. by N. Mailer. This book is published in Japan
by arrangement with S. Meredith through C. E. Tuttle Co., Tokyo.*

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／凸版印刷株式会社 製本所／大口製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／中田製函株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

第二部	陶土と型(続)	9
第三部	植物と幻影	102
第四部	船跡	448

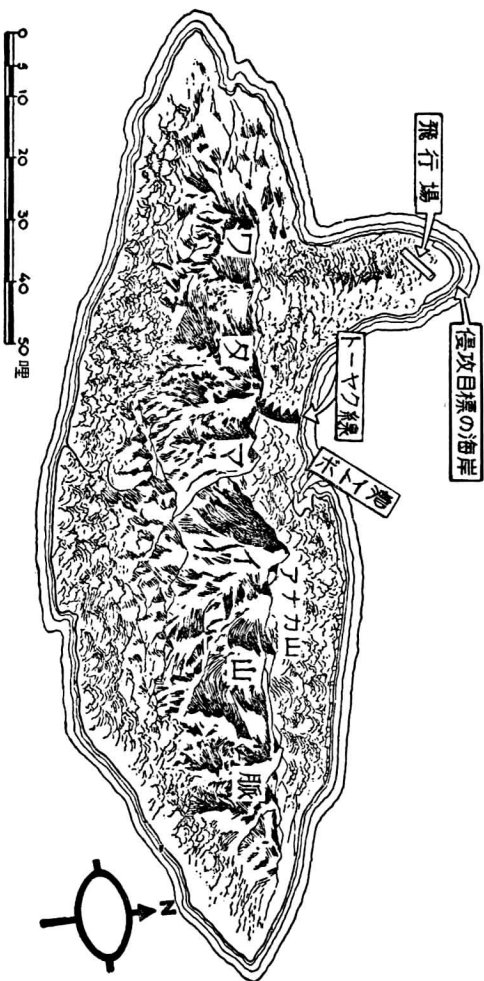
The Naked and the Dead

by

Norman Mailer

*Copyright in U. S. A. by Norman Mailer 1949.
This book is published in Japan by arrangement
with Franz J. Horch through C. E. Tuttle Co., Tokyo.*

アノポパイ島



裸者と死者
(Ⅱ)

つぎの歌から歌詞を引用することを許可して下さった出版者と版權所有者に、深甚の謝意を表する。

『ベティ』ボール・フォガーティ、ルーヂィ・ウァリー共作、ニューヨーク市カール・フィッシャー社版權所有（一九三〇年）。その許可をえて使用する。

『兄弟、十錢玉一つ貸さないか？』E・Y・ハーバーク作詞、ジェイ・ゴーンエイ作曲。ハームズ社版權所有（一九三二年）。音楽出版者協会の許可をえて使用する。

『褪せた夏の日の恋』フィル・バックスター作詞ならびに作曲、レオ・フイースト社（一九三一年）。その許可をえて使用する。

『わたしやバレードが大好きだ』テッド・ケーラー作詞、ハロルド・アーレン作曲、ハームズ社版權所有（一九三一年）。音楽出版者協会の許可をえて使用する。

『家へいく道おしえてたもれ』アーヴィング・キング作詞ならびに作曲、ハームズ社版權所有（一九二五年）。音楽出版者協会の許可をえて使用する。

『これをおもうとおまえが恋し』ジャック・ストラチイ、ハロルド・マーヴェル、ハリ・リンク共作、バーン社版權所有（一九三五年）。その許可をえて使用する。

ノーマン・メイラー版權所有（一九四八年）アメリカ合衆国、ニューヨーク市J・J・リトル・フィヴズ社印刷。一切の權利を保有す

この小説を執筆中、いろんなときにわたくしを助け、励ましてくださった、ウィリアム・レーニイ、シオドア・S・アマッセン、ならびにチャールズ・デヴリンに感謝す。

*

*

*

この小説中の人物や出来事は、すべて仮作的なものであって、生きている、または死去した人物に似たところがあっても、それは偶然の一致にすぎない。

母
上
と
ビ
ー
へ

第二部 陶土と型（続）

12

ミネッタは負傷すると、師団野戦病院へおくられた。それはひどく小さな病院だった。十二名を収容できる分隊テントが八つ、海岸に近い空地に建てられていた。テントは四つずつ、二列にならんでいて、各テントの周囲には、四フィートの高さの砂囊の壁がつくられていた。空地の一方のはしにある、いくつかのよぶんのテントをのぞけば、これが病院の全体であった。このよぶんのテントは、野戦炊事場や、軍医とここで働く下士官兵の住居になっていた。

病院は、いつもひっそりしていた。午後の二、三時ごろになると、空気は重くなるしくなり、テントのな

かは、強烈な太陽の直射のため、たえられないほど暑くなった。たいていの傷病兵は、気持ちわるげにぶつぶつ寝言をいったり、傷の痛みにうめき声をだしながら、うとうと眠っていた。じっさいすることといつては、ほとんどなにもなかった。少数の回復期患者も、トランプをやったり、雑誌をよんだり、せいぜい空地の中央でシャワーをあびるぐらいのものだった。空地の中央には、ココ椰子の丸太でつくった壇の上に、ガソリンのドラム罐がおいであって、それに水がいっぱい満たしてあった。一日三どの食事と、軍医の午前の回診があった。

ミネッタは、はじめは楽しかった。彼のうけた傷は、ほとんどかすり傷のようなものだった。太腿に二、三インチほどあぐり傷口が開いていたが、弾はなかにとどまっていず、出血もひどくはなかった。負傷してから一時間後に、ちよつとびっこをひいただけであることができた。病院では、寝台と何枚かの毛布をあたえられた。彼は気持ちよくベッドに寝て、暗くなるまで雑誌をよんだ。軍医は彼をほんのざっと診察し、傷口にズルファ粉末をつけただけで、あくる朝

までほっておいた。ミネッタは弱々しい、快い気持ちになっていた。彼はちょうど倦怠を感じる程度の、軽い衝撃を感じていた。そのおかげで、弾があたったときに感じた驚愕と苦痛を考えないでいられた。歩哨にたたき起こされずに眠ることができるのは、この六週間来はじめてだった。寝台は、地面に寝るのとくらべると、柔らかで、ぜいたくな気がした。彼は元氣な、きびきびした気持ちで目をさました。そして、軍医がまわってくるまで、おなじテントにいる兵のひとりと将棋をさした。患者はわずかしいなかった。ミネッタはまえの晩、暗闇のなかで彼らと話をしたことを、漠然と快く記憶していた。これならokだぞ、とミネッタはおもった。一カ月も病院においてくれるか、でなかったら、たぶんほかの島へひきあげさせてくれるだろう、と考えた。そして、自分の傷は非常に重傷なんだ、と自分でおもいはじめた。

だが、軍医は彼の足をちょっと一目見、包帯をまきかえて、いった。「あすまでには退院できるだろう」
そういわれると、ミネッタは胸をつかれる思いがした。「そうでしょうか？」と、彼はやっと、力をこめ

ていうことができた。彼はちょっと苦しうなふりをしてしながら、寝台の上で体を動かして、いった。「仲間のところへかえっていきたいものですよ」

「まあ、あせらんで、気をらくにしてみえ」と、軍医はいった。「あすの朝になってようすを見よう」彼は手帳になにか書きつけて、つぎの寝台のほうへいった。ろくでなしめ、おれやあるくこともできないんだぞ、とミネッタは心でおもった。彼の考えを証拠だてるかのように、足がちょっと痛みはじめた。あいつらは、ひとがここで生きようが死のうが、そんなことはちっともかまいやしないんだ、とにがにがしい気持ちでおもった。やつらはただ、弾のあたるところへひとをつきかえしたいと考えてるだけなんだ。彼は不きげんになって、午後中うとうと眠りとおした。針で縫ってもくれやあしない、と彼はいちどひとりごとをいった。

夕方になって、雨が降りはじめた。彼はテントの下で、快い安全感を感じた。ほんとに、こんや歩哨に立たなくてもいいなんて、ありがたいなあ。彼はテントをうつ土砂降りの音に耳をかたむけながら、小隊の仲

間のことをおもって、快い同情を感じた。連中、湿った毛布のなかで目をさまされて、雨が服にしみこんでくるぬかるみの機関銃座の壕^{ごう}のなかで、ぶるぶる身をふるわせながらすわっていないくちやならんだろう。

「おれやまっぴらだ」と、彼はいった。

だが、そういうしながら、彼は軍医のいったことをおもいだした。あすもまた小雨がふってるだろう。毎日雨なんだから。もどっていったら、道路工事や浜辺の作業をしたり、夜歩哨にたったりするだろう。それから、おそらく、じき斥候にやられることだろう。そうしたら、負傷どころか、殺されるかもしれない。

彼は浜辺でやられたときのようすをおもいだして、ぎよっとした。小銃弾のようなちっぽけなもので怪我したなんて、ありえないことのようにおもえた。銃撃の音、あのときの気持ちがあったもどってきて、おもわず身震いした。ほんとでないような気がした。自分の顔を鏡のなかで、あんまり長いこと見つめていると、ほんとの顔でないようにおもわれてくるのとおなじだ。ミネッタは、毛布をひっぱって、肩をかくした。大丈夫、やつらはあすおれをつきかえしやしない、と自分

を安心させた。

朝になって、軍医がまわってくるまえに、ミネッタは包帯をほいて、傷口をしらべてみた。もうほとんどなおっていた。傷口の肉はあわさって、新しい薄赤い肉がついていた。これじゃ、やつらはきつときょう、自分を退院させるだろう。ミネッタはあたりを見まわした。他の兵士たちはなにか仕事をしているか、または眠っていた。彼は素早く傷口を引き裂いた。傷口からは血が出だした。心やましい喜びを感じながら、ふるえる指で包帯をまいた。毛布の下で、彼は二、三分ごとに傷口をこすっては出血させた。そしていらいらした焦燥を感じながら、軍医のやってくるのをまった。腿が熱をおび、包帯の下がべとべとするような気がした。ミネッタはとなりの寝台^{コック}にねている兵士のほうをむいていった。「おれの足は出血してるよ。傷って、おかしなもんだなあ」

「うん」

軍医が診察するとき、ミネッタは黙っていた。「傷口が開いているじゃないか」

「はあ」

軍医は包帯を見た。「包帯をいじりやしなかったらうな？」と、軍医はたずねた。

「そんなこたあないとおもいますよ。ただ出血しだしたんです」こいつおれの肚を知ってやがるんだ、とミネッタはおもった。「大丈夫ですよ。きょうは隊へかえっていきましょう？」と訴えるような調子でいった。

「まあ、もう一日まったほうがいい。こんなふうに口が開いちゃいかん」軍医はまた包帯をしはじめた。「こんどは包帯をそっとしとくんだけ」

「ええ、そっとしときますとも」彼は軍医がつぎへあるいていくのを見まもった。ミネッタは気がめいった。こんな手は二どとは打てんぞ、と彼はおもった。

彼は、なにかほかに病院にのこっていられる手段を考えだそうとして、一日中落ち着かなかった。やっぱり小隊へもどっていかなくちゃならんのだとおもうと、そのたびに、がっかりした気持ちになった。彼は労働と戦闘とのはてしない反復の、いつおわるのもしれぬ日々をおもった。小隊にや友だちさえないんだ。ポラックのやつなんか、当てにならぬ。彼は自分が憎

悪しているブラウンとスタンレーのことをおもい、恐れているクロフトのことをおもった。やつらは関をつくってるんだ。彼は戦争のことを考えた。戦争は永久につづくだろう。この島がすんだら、つぎの島となり、そのまたつぎの島となるだろう……ああーあ、ことなく戦争にや、将来もくそもないんだ。彼はちょっと眠った。目がさめたときには、もっとみじめな気持ちになっていた。こんなことは、とてもがまんができん、と彼はひとりごとをいった。自分はもし運がよかったら、ほんとにひどい怪我をして、いまごろは飛行機でアメリカへ運ばれているだろう。ミネッタはそのことをじっと考えこんだ。いつか彼はポラックにむかって、もし、自分が病院にはいったら、小隊なんかへは二どともどっていきやあしない、と大言したことがあった。「まあひとつぼくを入院させてみる。そうしたら、きつとうまくやってみせるから」と、彼はいったのだった。

なにか方法があるはずだ。ミネッタは途方もない考えを、つぎつぎに放棄した。銃剣を傷口につっこむ手や、本部中隊へもどっていくとき、トラックからころ

げおちる手を考えてみた。寝台^{コト}のなかで体をねじつて、自分を情けなくおもった。寝台^{コト}のひとつで、兵士がちよっと呻^{うめ}き声をあげた。それが彼をいらだたせた。あいつ、黙らないと、氣違^{ちが}いになっちまうぞ、とおもった。

その考えが、はつきり言葉にならずに、心に閃^{ひら}めいた。彼はその考えをわすれてしまうかもしれないという恐怖におそわれ、興奮して起きなおった。おお、これだ、これだ、とひとりごとをいいつづけた。そして、それがどんなに困難なことをかをおもって、氣がおびえた。はたして自分にその勇氣があるだろうか、と自問した。いつか聞いたことのある、そういう理由で抜けだしてしまった兵士の話をおもいだそうとして、身じろぎもせずよこたわっていた。そうだ、第八セクションだ、とひとりごとをいった。彼は、自分とおなじ訓練小隊にいた兵士のひとりをおもいだした。やせた、神経質な男で、射撃場で小銃を発射してから、泣きだしたのだった。その兵士は、病院にいれられた。そして何週間かたってから、除隊になったということを知った。これだ、これだ、とミネットはひとりごと

をいった。彼は、一瞬、ほんとに自分が兵役を免除されたように、幸福な気持ちがした。おれや氣が利^きいていることにかけてや、この連中のだれにも負けやしない。きつとうまくやつのけることができる。神経衝撃、神経衝撃、それだ、それだ。おれや現に負傷したじゃないか。軍隊は負傷したものは除隊にすると、ひとは考えるかもしれない。だが、やつらは負傷したものをいいかげんに治療して、つかえすだけだ。大砲の餌食^{えじき}、やつらはわれわれを、それくらいにしか考えてないんだ。ミネットは憤激を覚えた。

だが、そうした気分はおとろえて、またおびえだした。ポラックのやつと話すことができたならなあ。あいつなら、どうやってのけたらいいか、知ってるだろう。ミネットは自分の手を見た。自分はポラックなんかには負けやしない。あいつが相かわらず軍隊をすっぱかすことをしゃべってるあいだに、自分はさっさと出てしまふことができるんだ。彼は額に手をあてた。やつらは自分をここには二日しかおかないで、氣違^{ちが}いをいれておくほかの病院におくるだろう。そこへいきや、氣違^{ちが}いのまねをすることができる。ふいに、彼は

またがっかりした。あの軍医のやつ、おれを見てはいやあがる。こいつは骨が折れるぞ。ミネッタはテントの中央にあるテーブルのところへびっこをひきひきいって、雑誌をとりあげた。もし出たら、「へん、いま気が狂ってるのはだれだい？」と、ポラックに手紙を書いてやることができる。ミネッタは、その手紙をよむときのポラックの顔をおもって、くすくす笑いだした。ただ勇気があるかないかの問題だ、とひとりごとをいった。

彼はよこになって、雑誌を顔の上にのせたまま、半時間も身動きもせずじっとしていた。太陽はテントを熱して、まるで蒸し風呂ぶろのようにした。ミネッタは弱々しい、みじめな気持ちになった。身内の急迫が増大した。考えもせず、とつぜん彼はぱっとたちあがって、金切り声で絶叫した。「ろくでなしめ」

「興奮しちやいかん」と、近くの寝台コットから兵士がいった。

ミネッタは雑誌をその兵士に投げつけて、絶叫した。「テントのそとに日本兵ジャップがいるぞ、そら、あそこ

うにあたりを見まわして叫んだ。「銃はどこだ、銃をよこせ」彼は興奮のためがたがたふるえていた。自分の銃をとりあげると、テントの入り口から外を狙った。「日本人だ、日本人だ」と、叫んで、銃を発射した。彼は自分の大胆不敵さにちょっと驚きながら、麻痺まいりしたようにその銃声を聞いた。こりゃ俳優になったほうがいいな、と、ふと心のなかでおもった。彼は兵士たちが自分をつかまえることとおもって、まっていた。だが、だれひとり身動きするものもなかった。みんなは驚愕と恐怖のため、自分たちの寝台コットに凍りついたようになつて、油断なく彼を見まもっていた。「銃をすてろ。やつらは攻撃してるぞ」と、彼はいって、自分の銃を地面に投げだした。それをいちどけとばして、それから自分の寝台コットのほうへいき、こんどはそれをもちあげて、放りだした。そして地面に身をなげて、絶叫しはじめた。ひとりの兵士が彼の上にとびかかった。ミネッタはちよつと身をもがいたが、やがてぐったりした。兵士たちの叫び声や、こちへかけてくる足音が聞こえた。やったぞ、ほんとに、と彼はおもった。彼はがたがた身震いをはじめ、口もとにつばをた